

見えるモノはあるのか？——仏教認識論的視点から

熊谷誠慈（京都女子大学発達教育学部専任講師）

Seiji KUMAGAI



1980年広島市生まれ。京都大学大学院修了、文学博士。現在、京都女子大学発達教育学部専任講師、本年10月よりこころの未来研究センター特任准教授を兼任。専門はインド・チベット・ブータン仏教、ボン教（チベットの土着宗教）の比較思想史研究。王立ブータン研究所（Centre for Bhutan Studies）と共同で、ブータン仏教研究プロジェクト（Bhutanese Buddhism Research Project）を進行中。著書に *The Two Truths in Bon* (Vajra Publications, 2011)、*Revisiting Tibetan Religion and Philosophy* (共編著、*Revue d'Etudes Tibétaines* 21, Centre National de la Recherche Scientifique, 2011) ほか。

はじめに～見えるモノとは？～

見えるモノはあるのか。われわれはふつう「そんなことは当たり前だ」と思う。しかしながら、仏教的な立場からすると、この「常識」は途端に真とは言えなくなる。仏教では、自分の見ているモノや考えているコトが唯一の真実であると思込み執着してしまうことから、怒りや争いなどが起こり、結果として苦悩を引き起こしてしまうと考える。逆に言えば、自分の見解や認識の誤りを修正し、モノを「あるがままに」正しく認識することができたならば、当然そうした苦悩もなくなる。そこで仏教は、自己の認識の誤謬を排除し、物事のありようを正しくしかと見る

ことで苦悩の消滅を図るという手法を採る。では、仏教における「モノの正しい見方」とは何であろうか。本稿では、数多ある仏教思想の中でも、とりわけインド仏教の主要な4学派の説に沿って、仏教徒たちが構築した認識論を紹介したい。

4大学派とは

「仏教」とは、その名のとおり「仏陀の説いた教え」である。紀元前4～5世紀頃、「ゴータマ・シッダールタ」という一宗教家が説いたこの教えは、口頭伝承により師から弟子へと連綿と伝えられ教勢を伸張していく中で、各地の風土・文化の影響を受けつつ変容していった。仏陀が滅して後100年頃には、教団が上座部と大衆部とに根本分裂し、以後、18あるいは20部派にまで枝末分裂したと言われている。そのうち、上座部仏教はスリランカや東南アジアに広く現存している。一方、紀元前後には大乘仏教が生じ、その後、7世紀頃を迎えると、土着的・呪術的色彩の濃い密教の勢力が強まり、インドおよびその東北地域に広く浸透した。

このようにアジア全域に伝わった各種の仏教を単純に図式化することは実質上、不可能であるが、たとえばチベットやブータンの仏教では、しばしば仏教を大きく4つの学派に区分する。まず、小乗と大乘の2つ、そして小乗を説一切有部と経量部に、大乘を唯識派と中観派に細分する。

もちろん、これら4学派が仏教すべてを代表するわけではなく、この区分も詳細に検討すれば、問題がないわけではない。しかし、仏教認識

論の大まかな理解には便利であるため、本稿ではこの4大学派の説に沿って論述を進めていく。

仏教全般に共通する認識論的範疇

仏教全般に共通する認識論的なカテゴリーとしては、「五蘊」、「十二処」、「十八界」などが挙げられよう。

◎五蘊

個人存在を、物質面である「色」と、精神面である「受」・「想」・「行」・「識」の計5つの要素に分けた、「五蘊」というカテゴリーが設定される。

このうち、「色」とは肉体などを構成する物質的要素である。一方、精神面のうち「受」とは“認識主体が認識対象を感受すること”、「想」とは“感受したものを表象すること”、「行」とは“表象によって心が種々に動機づけられて行為に向かうこと”、「識」とは“精神的存在・こころ”を意味する。

◎十二処

「十二処」とは、この現象世界すべてを、6つの認識主体と6つの認識対象とに区分したカテゴリーである。

まず、認識主体としては「眼」（視覚）、「耳」（聴覚）、「鼻」（嗅覚）、「舌」（味覚）、「身」（触覚）、「意」（思惟）の6つ、一方、認識対象としては「色」（視覚対象）、「声」（聴覚対象）、「香」（嗅覚対象）、「味」（味覚対象）、「触」（触覚対象）、「法」（思惟対象たる存在要素）の6つが挙げられる。

◎十八界

認識主体を「識」（認識機能）と

「根」(感覚器官)とに細分すると、「十八界」と呼ばれるカテゴリーが得られる。

認識主体のうち、「識」(認識機能)としては、「眼識」(視覚機能)、「耳識」(聴覚機能)、「鼻識」(嗅覚機能)、「舌識」(味覚機能)、「身識」(触覚機能)、「意識」(思惟機能)の6つ、また、「根」(感覚器官)としては、「眼根」(視覚機能)、「耳根」(聴覚機能)、「鼻根」(嗅覚機能)、「舌根」(味覚機能)、「身根」(触覚機能)、「意根」(思惟機能)の6つが挙げられる。

一方、認識対象としては上述の「色」、「声」、「香」、「味」、「触」、「法」の6つが挙げられ、本稿では立ち入らないが、これら6つはさらに細分化される。

説一切有部の認識論

以上に挙げた「五蘊」、「十二処」、「十八界」などの認識論的カテゴリーは仏教全般に共通するものである

が、上述の4大学派のうち、まずは「説一切有部」の認識論を見てみる。

《説一切有部の存在論における「こころ」》
われわれの認識に欠かせない「こころ」を、この学派はどのように考えているのであろうか。

説一切有部では、あらゆる「法」(存在要素)を、「無為法」と「有為法」の2つに分類する。

「無為法」とは“因果関係によって作られない存在”であり、「虚空」(空間)、「択滅」(無漏の智慧による煩惱の止滅)、「非択滅」(無漏の智慧によらない煩惱の止滅)などが挙げられる。

「有為法」とは、“因果関係によって作られる存在”であり、「色」、「心」、「心所」(精神作用)、「心不相応行」(心に伴わぬもの：色・心・心所以外のもの)の4つに分類される。

このうち「色」とは“物質的な存在要素”であり、「心」とは「意」や「識」と同義である。「心所」とは精神的な活動のことであり、「心不相

応行」とは色・心・心所以外のものとなる。このうち、「心」と「心所」の両方を合わせたものが広義の「こころ」を指し、「心」は狭義の「こころ」に相当すると言えよう。

《説一切有部の認識プロセス》

説一切有部の認識論の大きな特徴は、認識対象が外界に確固として実在するという「外界実在論」である。一方、後述するとおり、経量部は外界の実在は推理によってのみ確かめられるという「外界推理論」を主張し、唯識派は「外界非実在論」を説く。

説一切有部はさらに、1つの瞬間には1つの識が1つの対象だけを認識すると考える。たとえば食事の際、われわれは食べ物を見ながら、同時に香りをかぎ、味をあげ、食感を楽しんでいるように思う。しかし実際は、ある瞬間には食べ物を視覚で見て、次の瞬間には香りを嗅覚が捉え、次の瞬間には味を味覚で味わうという作業が、入れ替わり立



大仏画に触れるために行列を作るブータン人たち 彼らは大仏画を単なる美術品としてでなく仏・聖者そのものと見ている。

ち代り異なる瞬間に行われているとこの学派は主張する。われわれは日常の中で、こうした瞬間的な認識作用のズレを感じ取ることができず、まったく同一時の認識と錯覚してしまうのである。

経量部の認識論

一方、経量部は認識をどのように説明するのであろうか。

《経量部の存在論》

経量部は、説一切有部の「五位」(色・心・心所・心不相応行・無為)の categorie を基本的には踏襲しつつも部分的な改変を加える。

たとえば、説一切有部の主張する「心所」(精神作用)も、心の様態の一種に過ぎないものであるとして独立的な存在とはみなさない。

また、「心不相応行」(精神でもない物質でもないもの)は心の外にありながら、そのありように干渉する要素であるため、仮構された観念としてのみ存在を認める。

最後に、「無為」(因果関係によって作られない存在)も、認識器官によってその実在性が確認できない虚構の観念的存在に過ぎないため、実在物とはみなさない。

《経量部の認識プロセス》

経量部にとって、外界の対象とは「知を生じさせる能力を持つもの」、すなわち認識を引き起こす原因である。外界の対象は、原子の集合体であるがゆえにそれ自体は独立的存在ではないが、対象が外界に存在したその次の瞬間に、眼・耳・鼻・舌・身といった感官の知覚を生じさせ、その次には意知覚、さらにその次の瞬間には概念知を生じさせるという。

この点、説一切有部との大きな隔たりに注目する必要がある。すなわち説一切有部が、ある瞬間の対象を同じ瞬間の認識主体が認識するという「同時認識」を主張するのに対し、

経量部は、対象を認識するのは次の瞬間の認識主体であるという「異時認識」を提唱するのである。この両者の認識形態の相違は、ふだんまったく影響するところはないが、日常生活のスケールを大きく超えた領域では明確な差を生む。たとえば、今見ている太陽を私たちは現在のものと誤認しがちであるが、光のスピードと太陽と観測者までの距離を計測してみると、約8分20秒前の過去の太陽であることがわかる。これは太陽が地球からはるか遠くに位置するために生じる非日常的な時間上のギャップであるが、この理屈からすると、われわれの眼前に存在するモノもまた、私たちが認識したその瞬間にはすでに過去のものになっていることが類推されよう。このように、科学的視点からすれば、経量部の学説が説一切有部のそれよりも正確であると言える。

瑜伽行唯識派の認識論

さて、後述する中観派の開祖、ナーガールジュナ (ca. 150-250) の「すべての存在物には実体が存在しない」という主張に従えば、認識主体・認識対象・認識手段の三者ともに実在性を持たないことになるが、この学説は中観派より遅れて成立した瑜伽行唯識派の「外界非実在論」に影響を与える。

では、外界が実在しない条件下で、どのようにして認識が生じるのか。この問いに対して唯識派は、「識」には外界の対象の有無にかかわらず、あらゆる表象を生成する能力が備わっていると考え。たとえば、川は人間にとっては清浄な水の流れとして顕現するが、一方、「餓鬼」にとっては流動する汚物として、「地獄の罪人」にとっては流れて止まない炎として顕現する。このように、同一のもので、見る者の境遇いかに応じてさまざまに表象されるのであり、経量部が考えるように

外界の対象が表象を引き起こすのではなく、主観の内側から自発的に表象が生起すると主張する。

すなわち、一般にわれわれが外界に認識している対象も、実のところ、識によって形成された実体なき虚妄に過ぎないと考えるのである。

《瑜伽行唯識派の認識論》

唯識派は、心 (= 識) がすべての法 (存在要素) を包含すると考える。この場合、説一切有部の掲げた五位の categorie はどうなるのか。

まず、色 (物質的な存在要素) は心が自ら生みだした表象にすぎず、実在する外界の対象とは認められない。心所 (精神作用) は心と同一の対象を持ちつつ、同時に機能する。心不相応行 (物質でも精神でもないもの)、すなわち、単語や文章など言語的・論理的な要素の総称はすべて、心の作り出した非実体的な観念にすぎない。無為法 (因果関係によって作られない存在) も、それが存在要素として客体的に思惟されるものである限り、心によって作り出された概念に過ぎない。

以上のように唯識派は、心以外のものはすべて心によって作り出された虚構と考える。

《八識説》

識 (認識機能) に関して、唯識派は他学派とは異色の独自の見解を打ち出す。すでに述べたように、仏教では通常、眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識の六識を設定するが、唯識派は六識に、「マナ識 (自我意識)」と「アーヤ識」を加えた八識を説く。

六識とマナ識が現勢的な識であるのに対し、アーヤ識は、現勢的な識の働きを引き起こす「習気」(意識の潜在的種子) を蓄積しながら絶え間なく流れ続ける潜在意識と規定される。潜在的な形でアーヤ識の中に存在していた「習気」が異熟し、現勢的な識が発動する時に、表象が識の上に顕れて知覚器官に直接知覚

され、それが意識によって思惟され概念化される。そして、それがマナ識に伴われることで、六識は自我の外に実在する対象を認識することになるという。

中観派の認識論

最後に、中観派は4大学派の中でも特異な存在である。というのも、同派にとって究極的には「空」のみであるから、そもそも「中観派の教義」というもの自体存在せず、他学派の説を否定する形でしか主張が存在し得ない。ただ、世俗的なレベルにおいてのみ、暫定的に他学派の主張に合わせて議論を展開する。このように中観派は、「究極的なレベルの真実」(勝義諦)と「世俗的なレベルの真実」(世俗諦)の2種類の真実(二諦)を設定する。

ただし、「空」という真理をいかに論証するかは相違から、中観派は、「中観自立論証派」と「中観帰謬論証派」とに分かれ、前者はさらに「経量中観派」と「瑜伽行中観派」に分かれる。チベット人学僧ウパロサル(14世紀)の説明によれば、世俗的な段階において、前者は経量部説に、後者は瑜伽行唯識派の説に従うという。

しかし、両説ともに究極的(勝義的)な段階では否定される。すなわち、前述したように、外界の実在を認める経量部説も、マナ識やアーラヤ識の存在を認める瑜伽行唯識派説も、一切の実体を認めない中観派にしてみれば、畢竟、謬説でしかない。

このように、中観派は言語化不能の「空」の理解を主眼とするので、独自の体系的理論を持たず、他派の実体的学説の否定に終始するのである。

結語

本稿では、4大学派の学説に沿って仏教的な「モノの観方」を考察してきたが、そのいずれもが、ふだんの私たちの認識がいかに粗雑なもので

あるかを知らせてくれる。その際、学派ごとに理論が異なるとなると優劣をつけたくなくなってしまうものであるが、優劣を決めつける頑なな考え方は、そもそも「中道」を標榜する仏教からすると望ましくない。むしろ、個々人が各理論を適宜採用しながら、自らの認識を正しい方向へと導いて行くことこそ重要であろう。

仏教では、苦悩は「三毒」(執着、怒り、無知)から生じると説く。われわれの認識や知識に無知という欠陥があるために、モノに執着して怒りが引き起こされ、それが果てしない苦悩へと繋がるのである。逆に正しくモノを認識することができたなら、執着も怒りも姿を消し、苦悩からも解放される。その結果、この

上ない無比の安らぎを得ることが可能となる。このように仏教では、正しい認識こそ、幸福への捷徑なのである。

最後に、「見えるモノはあるのか？」という問いに、暫定的ではあるが答えを出しておかねばならない。「見えるモノがあるかないかは条件によって決まることであるが、少なくとも、今の私たちが認識している形としてはモノは存在していない」というのが現時点での結論である。

参考文献

Katsumi Mimaki, *Blo gsal grub mtha' chapitre IX (Vaibhāṣika) et XI (Yogācāra) édité et traduit*, Kyoto: Zinbun Kagaku Kenkyusyo, 1982, p. 166.2-16, 170.2-8.



ブータンの旧都プナカにあるゾンの本堂の入口
ブータン人たちはこの門の奥に何をみてきたのだろうか。